

10月の学習会の案内

平成26年10月9日

いつの間にやらもう10月の中旬です。附属小学校では、教育実習もスタートし、本当は、仕事を追いかけていたいところではあるのですが、現状は、追いかけてられていること間違いなしの日々です。どのタイミングかで、再度追い越したいと思っはいるのですがなかなか難しいですね。何かいい案をお持ちの先生がいらっしゃいましたら、ぜひコツをお伺いしたいものです。

さて語る会です。案内が遅くなりいつも申し訳ありません。今月も以下の通り開催いたします。多くの先生方のご参加をお待ちしています。

日 時	平成26年10月18日(土) 9:30~12:00
場 所	岡山大学教師教育開発センター 東山ランチ2F 授業研究室 ※今月は、東山ランチです。 TEL(086)272-0511 FAX(086)271-3455
連絡先	小出 真規(こいで まさき) TEL 090-5704-7339 m-koide@okayama-u.ac.jp (学校パソコン) m-koi.freewill.ns.io@docomo.ne.jp (携帯メール)
内 容	「鳥獣戯画」を読む(第6学年 光村図書) 授業の具体化(丸ごと読み)へ向けた話し合い(予定)

<お知らせ>

※ 駐車場について

東山ランチの駐車場をお使いください。

※今年度の**年会費2,000円**を集めています。まだの先生方がおられましたら、ぜひ、よろしく
願います。

ご案内

第39回 岡山県小学校国語教育研究大会

日時 平成26年11月20日(木) 9:15(受付開始)～16:30
場所 倉敷市立中洲小学校
大会主題 「自覚的なことばの学び手を育てる国語科授業の創造」
～自分の思いや考えをもち、伝え合う力を育てる授業づくりを通して～

公開授業

- 1年 お話をたのしもう「たぬきの糸車」
- 2年 お話をよんで、しょうかいしよう「お手紙」
- 3年 登場人物を中心に、物語をしょうかいしよう「モチモチの木」
- 4年 読んで考えたことを話し合おう「ごんぎつね」
- 5年 作品を自分なりにとらえ、思いや考えをもとう「大造じいさんとガン」
- 6年 物語を読んで、人物の生き方について考えよう「海の命」

講演 「自分の思いや考えを広げたり深めたりする子どもの育成をめざして」
横浜国立大学教授 高木 まさき 先生

昨年度からの中洲小学校の研究成果をご覧頂くことができる会です。公開授業も馴染みの深い文学教材ばかりです。また、講演は、国語教育において広くご活躍されている高木 まさき先生にお願いしています。平日ではありますが、ぜひ、多くの先生方にご参会いただければと思います。お勤めの学校に2次案内がまもなく届く予定です。詳しい内容をご確認の上、ぜひお申し込みください。

平成26年度岡山大学教育学部附属幼・小・中教育研究発表会

日時 平成26年11月14日(金) 8:50(受付開始)～16:50
15日(土) 8:15(受付開始)～16:40
場所 岡山大学教育学部附属小学校、幼稚園、中学校
研究主題 考える力を育てることばの教育

本年度は、幼小中の3校園合同の研究発表会です。幼小中の一貫教育カリキュラムの公開、また考える力とことばの学びについて研究してきたことについて授業実践を通して公開いたします。くわしくは、添付のファイルをご覧いただければと思います。こちらの会もぜひ、お運びくださればと思います。よろしく申し上げます。

9月語る会の内容

文責 小出

●田中先生より

前回の寺田守先生の話。作品をどのように読むのか、学習者個人が大切に思うところを取り上げ、全体へ返していくという点で、私たちの取り組みに近いものがあった。

寺田先生の著書。各教材の各表現についてどのような解釈ができるのかということが研究されてのっている。教材研究をする際の参考になる。寺田先生のホームページにも同じ内容がアップされている。

京都教育大学のサイトから教育支援ネットワーク「授業の種」のリンクをチェック

<http://kyoushien.kyokyo-u.ac.jp/terada2/terada02.htm>

読者が作品を読んでいく道筋でどのような方略を使って受容していくのか、それが教科内容で、そのことを身に付けるのが重要。だが、それだけでなく、その中身の経験を蓄積していくことが教育では重要。それを教材ごとに確定させていくのは先行事例を研究することも大切だが、最終的には、授業者である教員がどう読んでいるかが重要になってくる。方略が提供されていても、その作品の内容や思想を子どもが自分のこととして考えられるようにならないと価値は半減。

かつては、逆に、方略を身に付けるということが軽視されていた。また、テクニックを身に付けるということだけに重きを置くということも間違い。両方を欠かすことなく取り組んでいくことが大切。

説明文。中学年、段落相互の関係。高学年、段落の要旨ということが出てくる。そこだけに注目していると、段落の内容を整理して、段落構成を考えるということになる。3読法のように、部分を積み重ねていって全体が理解できるということであったが、それでは不十分だと最近では考えられている。だが、段落の要旨を捉えるという活動をするのがいつも不要というわけではない。最終的に子どもたちにその学年で付けたいという力を想定して、年間を通して見て、部分を構成していく学習ということも考えられる。ただし、一単元の授業を進めていく場合に、先生としては、その活動（例えば要約）をする必然があっても、学習者にそれがなければ、先生に言われているからしています、ということになってしまう。そして、「先生、次は何をしたらいいんですか」ということになって、学習という全体の方向性からすると間違った方向へいってしまう。

クローズアップ現代。生放送は大変。やりなおしをきかない番組。キャスターの国谷さんが、ゲストとやりとりするのは30分の中の10分くらい。何をこの番組を通して伝えたいかを明確にしておかないと、何が大切だったのか分からない番組になってしまい、後で後悔することになってしまう。あれもこれもと拡散するのはだめ。授業でも全く同じことが起こる。

来年は教科書が変わる。新教材へのアプローチということもこの会としていってはどうか。どう切り込んでいくか、先行研究がない中でどうやっていくかということが提案できる。

●小川先生

運動会のシーズンだが、今は全く天気予報を見ない。環境が人を作ると改めて思う。(IPUの)学生は、全国各地で地元にもどって教育実習を行っている。兵庫と広島は学校へ訪問して、あいさつをする。学校の統廃合があって訪問が大変だった。広島の実習は、回数が多い。岡山は観察が多い。現場としては広島スタイルがいい。

最近の研修では、つなぎ反応、筆者反応、納得反応を先生自身がしてみませんか、板書計画を一枚に作っていませんか、それらを教材研究として、また授業の補助資料として作っていませんか。という話をしている。教師自身が読みを作らずに授業をしている。表現や仕掛けからどう読みを作ったかという過程が大事。そこを教師自身がしておかないと、子どもが読みを作っても評価できない。教師が経験していれば、子どもの読みを位置づけられる。価値ある反応というものも自分が経験していればそれがわかる。現場は反応の発表会という

レベルで終始している。学力としてアップさせていくためには、教師の教材研究が大切。少しずつ変わっていくとよい。

今日の内容。教材研究レベルで止まらずに、学習場面を4つにわけて、それぞれから、子どもがどのような読みを作っていくかということをグループごとにしていく。以前の会での反応

1 場面 ①～②段落 + ③～④段落 (わける手もあり)

2 場面 ⑤～⑦段落

3 場面 ⑧～⑨段落

使っていきたい4つの反応 (ここまでの教材研究を通じて)

気付き反応

単純に言うと、この文章を読みながら、言葉とか仕掛けに立ち止まって気付いたことを書き込んでいく反応。

筆者反応

高畑さんが読み手へ向けて表している、伝えようとしている、そこに反応していく。表現駆動と言える部分。

納得反応

「のである」「なのだ」「しか考えられない」といった表現で述べられている筆者の考えに納得できるかどうか。

つなぎ反応

概念を書いてあるところと具体が述べられているところ。それらをつないだりする作業が必要。そこをつなぎ反応とする。

こうした反応を使いながら、各段落を読んでいく。

1 次の想定は、題名や①②段落から、「どうやら、鳥獣戯画についての高畑さんらしいとらえかたがこの文章には書かれているよ。漫画の祖、アニメの祖 人類の宝など。それに納得できるか。また、どうそれについて考えられるか。それらを場面ごとに読んでいく。それぞれの場面で高畑さんらしいところ (漫画の祖、アニメの祖など) を確かめて、それに納得できるかという展開

接続詞、文末表現、指示詞ということに着目して読むということは、目標の欄には書かれているが、実際の授業ではあまり見られない。授業の最後で少し出てくる程度。読み手が読みを作っている段階でそれらに着目して反応できる子どもを作っていく必要がある。接続詞に出会うたびに、子どもが反応する。「しかし」「だから」などに反応してその後を予想して読むといった子を目指していくということも検討に入れていければ。

「石黒圭 「文章は接続詞で決まる」(光文社新書)」を引用

接続詞は書き手のためのものであり、読み手のためのものでもある。つまり、接続詞に出会った瞬間に次を予想するという構えをもって次を読んでいる。着目することによって、読み手の方向付けがなされていくのではないか。

●田中先生

石黒圭さんの本。参考文献を読むというときには自分をしっかりもつことも大切。影響を受けすぎて、授業に悪影響が出るようではいけない。

●小川先生

接続詞に着目した授業開発が必要なのでは。

子どもが接続詞に着目する着眼点をもてるようにするには。という点でこの本は参考になるのではないかと。残り十分の中で接続詞のよさを経験することができれば、子どもは次にそれに着眼しようとするのではないか。

グループ発表

A グループ（磯野先生）

漫画の祖、アニメの祖で2時間ということであったが、「漫画の祖」という部分に限って話し合いを行った。めあては、『本当に鳥獣戯画は「漫画の祖」と言えるだろうか』を想定

高畑さんは、たしかに漫画みたいと言っているが、本当だろうかに子どもの意識をもっていきたい。今の子どもたちにとって鳥獣戯画は普段接する漫画とはちがう。それなのになぜか。漫画みたいだと言っているが本当かということで①②段落を読んでいこう、としていく。ということで、子どもがめあてをもち発表をしていく。最後には、高畑さんの言う漫画みたいということに納得するところへ収まっていくという授業を考えた。

B グループ（小野先生）

前の授業で漫画の祖、アニメの祖をたしかめてきているので、この場面の授業では、めあては、「その二つを確かめよう」とするか、「対話的な表現を確かめよう」と切り替わった方がいいのかということで話し合ってきた。子どもたちが何を反応したいのかと考えると、「絵」と「絵をとらえた記述」と「絵の解釈の記述」をつなぐということになると考えた。⑥段落でいうと、「背中や右足の線」と実際の絵とそれに対する筆者の「なぜ～ちがいない」とをつなぐ。そして、筆者の考えを評価するということになっていく。筆者が問いかけてくるところ（対話的表現）については、反応しないのではないか。筆者が作品を評価しているところについては、反応してくるであろうが、対話的表現については、反応してこないのではないか。「たいしたものだ」「実にすばらしい」に対して、つなぎ反応で読んでいく。最後の「君たちの番だ」については、つなぎ反応で読んできたことで、実際に自分たちで書いてみて、筆者の考えを自分に引き寄せて考えることができるのではないかと考えた。

C グループ（森下先生）

めあては、「本当に人類の宝なのかたしかめよう」を想定。すると、子どもは「世界の夢」、「自由闊達」に反応してくるはず。「自由」に着目させると、「自由」という言葉で、色々な段落がつなげる。子どもは、自由という言葉をもとに、①～⑦段落をつないで発言してくる。

自由がいっぱい色々な言葉で出てくるので、それを整理して、類別していくと、発想の自由さ、動きの自由さ、見る人の自由さを言っているのではないか、ということになっていく。筆者はそのような自由があるということ述べている。だから、「自由闊達」となる、だから「人類の宝」と言っているというところにまとめていけたらと考えた。ただ、「世界の絵画」が実際に登場するわけではないので、子どもは比べられない。教師が自由のない絵を提示して比べることで、より意味づけられるようにしていく。めあてに対して納得できるかどうかということでもとめる。これほど自由だから納得、世界と比べたことがないので、やや納得できない。となっていくか。これからは、筆者が言うだけでなく、比べて判断していきたい。というまとめができたり、絵が人類の宝と言っているが、絵を描いた人の心がすばらしいといった読みができたりしていくとよいと考える。

●小川先生

「鳥獣戯画を読む」を本会の学習材として選定した時に、「生き物は円柱形」や「動いて考えてまた動く」や筆者の高野さんの話をした。なぜこうした説明文が増えたか。今までのものと異質なものが出てきている。学習指導要領の中に、読み手が自分の物の見方や考え方を広げること、批判的に読むということが示されていて、こうした作品が位置づけられている。

いろんな要素がある。国語科の教科指導。非連続性を読む、図とか絵とかそうしたものを読むということが

ある。この説明文を読みながら、①段落は描写表現にしてある。おかしくて、おもしろくてが読めるようにしている。①段落は、読み手をひきつけるだけでなく、漫画の祖としても読める。また、絵に着目して、おかしいとかおもしろいがあるので、そこにつなぎ反応が生まれる。描写とつながる、図とつながると両方がある。それをどう読みに取り入れていくか。

物の見方考え方については、高畑さんらしい考え方が出ている。最初は、この文章は解説した文章だ、と読んだ。次に、高畑さんは、鳥獣戯画が「人間の宝だ」ということが言いたいのだという読みに変わってきた。そう読もうとすると、それぞれの段落の位置づけがかわってくる。関係付けて読むようになってきた。それがこの前まで。今は、この説明文は何を言っているのか、改めて考えている。「読む」という行為を考えたときに、文章、絵、またはそれを合体したものを読む。様々な読むという対象がある中で、今から850年も前にこういうふうな物事をとらえて表現した人物がいたということを読む。読むという行為は、こうしたことを言う。価値目標が大切で、それが読めたときには、裏に表現がついている。読む中身としては、人間も読めるし、それを読み味わっていた昔の人々の心のおおらかさややわらかさというものを読むということも読むという世界にはある。読むということについてみんなはどういうふうに見方が広がりましたか、絵や言葉を読むことも大切だが、それらを読んでいると、その裏にいる人間がいるということが考えられる。6年生で、そこまでいかどうかわからないが、そこまで教師が読んでネットはった上で、子どもに対していくべき。この作品は非常に深い世界をもっている。

●田中先生

9段落。鳥獣戯画を保存してきた人類についての言及をみると、作った人とともに、保存し守ってきた人をも読んでいる。読む対象はかなり多様にとらえることができる。絵をみてわかること、描かれ方からわかること、保存してきた人々からわかること。抽象のレベルがちがう。抽象のはしご。それがよくあらわれている作品。

冒頭の②段落。「ただの空想……」から「……しか思えない」を見ると、③段落につながっているが、(鳥獣戯画を)表現した側からすると、正確に描きながら、(動物が相撲するという)現実ではないことを描いている。こう表現するには、そうすることによって、何かを表したい。リアルに非現実を描く、なぜそうしたのだろうか。そこに象徴的な意味を読み取ることが可能だが、あえてやっていない。あえてやっていないというところに意味を見出すこともできる。高畑さんがそのことに気付いていないはずはない。でもアニメや漫画の祖で述べていっている。それをふまえて見ていくと、筆者反応に意識を向けて、メタ認知、抽象のはしごをあがったりさがったりして見ていくと、高畑さんがアニメーターとして仕事を成功させてきたという情報を持ち込んで読むと、アニメーターとしての自分の仕事を再評価していると読める。筆者は自分のしている仕事が大事だと思ってしてきましたよ、ということ。850年の延長上の仕事をこれからの世代に伝えていきたいと思っている。という筆者を読むということもできる。書かれていない。推論。でも、「書かれていないことを読んではいけないの」と言うことで、筆者を読むということに出会わせることができる。

⑨段落、「世界を見渡しても……」断言しているが、ここはちょっと疑問が残る。本当だろうか、と評価もしながら読む読み手を育てていくという点からみると、疑問が残る。宗教画の話題があったが、宗教画は動きがあるものとしてとらえられている。グラスを傾けるなど。世界にないわけではない。絵巻という点から見ると、アルタミラ洞窟の壁画は動物の動きを表している。そういうものもある。筆者にもどると、自分の仕事が大事だということに目が向かっていて、世界の情報を収集して評論しているということではなくて、筆者はあえて、そこを「世界で」ということで、自分の仕事の大切さについて目が向けられるようにしているのではないか。

今までの説明文からいうと、ちがうところに踏み出している教材。新教材を研究するということは、これからの国語教育でどんなことに配慮していくかという点についても見ていくということにもなる。